

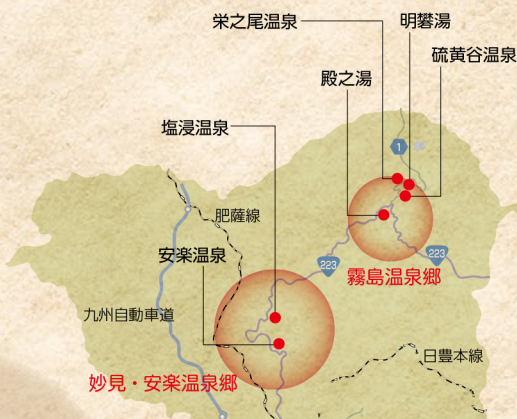
師走に入り、寒さも増してきました。寒い日は、温泉でゆっくり温まりたいものです。

霧島市内の温泉は、江戸時代から有名だったようで、天保14（1843）年に編さんされた薩摩藩の地誌『三国名勝図会』の中で踊郷（現在の牧園町）の部分は温泉の記事ばかりです。今回は、江戸時代に牧園の温泉がどのように描かれていたのかを紹介します。

藩主も訪れた温泉

『三国名勝図会』に記録がある温泉は硫黄谷温泉、栄之尾温泉、明礬湯、安楽温泉、塩浸温泉、殿之湯です。硫黄谷と栄之尾は、丸尾の温泉よりも山上にあります。記録によると、どちらも硫黄の成分が強いもの、お湯は澄み切っていました。湯治客が多く、宿泊施設があったほどです。藩主用のエリアがあったことから、藩主も訪れるほど良質な温泉だと思われる。栄之尾は硫黄谷より

江戸時代の霧島の温泉



硫黄成分が弱く、柔らかいお湯だったため、藩主用のエリアは栄之尾の方がはるかに広がったとあります。明礬山からお湯を引く明礬湯は、さらに山上にあり、眼病に良いとされています。古くから知られていましたが、現在は温泉地としては残っていません。

安楽温泉は、その地に宿泊した旅人が「ここは温泉が出るので、安らかに楽に過ごさなさい」という神のお告げを聞き、ほこらを建てて永住したところ、温泉が湧き出したという伝承があり、安楽という地名が付

けられたとあります。ほこらの跡は温泉神社になり、現在も残っています。

塩浸温泉は、坂本龍馬が入った温泉として有名ですが、その前から刀傷によく効くとして有名であることが記されています。傷だけでなく、病氣も治す「天下稀有の奇湯」と評されています。

殿之湯は、温泉の底が金色に見えることから、俗に「金の湯」と呼ばれていました。

神の力がもたらす効能

『三国名勝図会』では、硫黄谷温泉と栄之尾温泉などを「霧島の温泉」と総称し、「薩摩藩の中に温泉は数多くあるが、霧島の温泉が特に良いと天下に名が轟き、多くの人が藩内外から訪れている」とあります。その理由は、天孫降臨の地であるという伝承に基づいた、日本発祥の霊山・霧島山から霊気によって湧き出す温泉であることとされています。

ちょうど『三国名勝図会』が編さんされた頃は、全国的に「国学とい

う学問が流行し、『古事記』『日本書紀』などに書かれている神話が特に注目された時期でした。そのため、薩摩藩では温泉と神話を結び付け、霧島の温泉は「神効（神の力による効能）」があるとされました。

『三国名勝図会』は、薩摩藩が自分たちの支配領域の価値を高める意図を持って、記述している部分もあります。そのため、温泉の効能を「神効」と大げさに表現した可能性も考えられます。

（文責＝小水流）

郷土への扉

The gateway to local history

硫黄谷温泉



※1 特産や神社、伝承、歴史など、地域の情報をまとめたもの。特に『三国名勝図会』は江戸時代の薩摩藩の様子が分かるものとして有名。
 ※2 日本の古典・歴史などを調べる学問。